The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	阮朝治下ベトナムにおける国家統合と貨幣経済
Author(s)	多賀, 良寛
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61410
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（多賀　良寛）	
論文題名	阮朝治下ベトナムにおける国家統合と貨幣経済

論文内容の要旨

本論文は、19世紀前半のベトナムで進められた阮朝による国家統合の試みを、貨幣に着目して考察するものである。1802年に成立した阮朝は、主要貨幣として銭貨と銀を用いた。そこで本論文ではこの二種類の貨幣を中心に、当時のベトナムにおける国家の貨幣政策や市場での貨幣流通について論じる。

ベトナムにおける自国銭貨の鋳造は中国からの独立を達成した10世紀に始まり、歴代の王朝はその後1,000年近くにわたって年号銭の鋳造を続けた。ベトナムでは自国銭の鋳造額が長らく僅少で、国内市場では中国銭などの外国銭が広く用いられていた。18世紀になると、ベトナムの自国銭鋳造は急拡大を遂げる。北部では黎朝ー鄭氏政権が大量の銅銭を鋳造し、中南部では広南阮氏政権が銅銭にかえて亜鉛銭の鋳造に着手した。18世紀末に南北の政権を滅ぼしたタイソンも、短期間のうちに大量の鋳銭を行っている。阮朝が成立した時、ベトナムの市場ではこれらの銭貨が18世紀から引き続き大量に流通していた。そこで阮朝が取り組むこととなった課題は、市場に残る多様な銭貨を自らの法定銭貨＝制銭によって置き換え、国内に統一的な銭貨流通を打ち立てることであった。

阮朝は当初制銭として銅銭のみを鋳造したが、銅銭の鋳造量が伸び悩んだため、間もなく亜鉛銭の導入に踏み切った。それゆえ阮朝の制銭体制には、銅銭と亜鉛銭の二貨が併存することとなった。阮朝初期において、銅銭と亜鉛銭との間には規格上の差異がほとんど存在しなかった。しかし1820年に2代皇帝である明命帝が即位すると、銅銭の重量は大きく増加し、亜鉛銭との間に明確な差異が認められるようになる。こうした政策の背景には、銅銭と亜鉛銭を相互補完的な通貨として捉える明命帝独自の貨幣認識が存在していた。明命帝の貨幣認識において、短期的なタイムスパンで流通・支払い機能をカバーする亜鉛銭に対し、銅銭は政治的シンボル機能と価値保蔵機能を担うものとして位置づけられていた。阮朝は1840年頃より国庫に備蓄されていた銅銭を市場に放出し、亜鉛銭との間に固定レートを設けて広く流通させようとする。しかし1860年代には、北部ベトナムにおける銅銭流通の停滞が明らかとなった。その原因には、銅銭の規格と価値が不統一であったこと、市場に放出された銅銭の量が流通に必要な額を大きく下回っていたことなどが考えられる。

阮朝は自らの制銭をもとに国内貨幣流通の統一を進めた。そこで阮朝による通貨整理の主要なターゲットとなったのが、古号銭とタイソン銭という2グループの銭貨であった。阮朝期の行政文書である硃本の情報によれば、古号銭の中には黎朝の景興銭に代表されるベトナムの歴朝銭、清朝の制銭や呉三桂の銭貨などの中国銭が含まれていた。その中でも特に枚数が多かった銭貨は、景興銭、太平銭、元通銭の三種類である。太平銭と元通銭が指す具体的な銭貨にはいくつかの候補があるが、前者は北宋もしくは広南阮氏によって鋳造された太平通宝、後者は北宋または後代の日本で模鋳された元豊通宝を指す可能性が高い。阮朝は古号銭の合法的な流通を認めていたが、納税にあたっては自らが鋳造した制銭の使用を求めた。そのため高平省など一部地域では、流通手段（古号銭）と国家的支払い手段（制銭）の分離という状況が発生した。阮朝は制銭の投入と引き換えに、市場から大量の古号銭を回収していた。回収された古号銭の改鋳作業は1840年代を中心に進められたが、4代皇帝の嗣徳帝が1847年に即位すると、古号銭の改鋳は停止されることとなった。

市場での流通が認められた古号銭に対し、タイソン銭の行使は阮朝によって厳しく禁止された。その最も大きな理由は、阮朝がタイソンを「偽朝」とみなし、その政治的正統性を根本から否定していたことにある。ベトナム国内で流通を禁じられたタイソン銭は、1820年代から中国の東南沿海地域で広く流通し始めた。国家的な価値の裏付けを持たないタイソン銭が中国で受容された背景には、清朝による制銭鋳造の縮小とそれによる小額貨幣需給の逼迫が存在していた。

歴代王朝による長い鋳造の歴史を持つ銭貨に対し、銀錠の公鋳と財政運営における銀の導入は阮朝がベトナム史上初めて行った政策である。阮朝は国家によって品位の保証された銀錠を公鋳し、財政運営や市場での銀使用を促進しようとした。しかし当時の民間市場では、公鋳銀錠以外にも品位や携帯を異にする様々な銀貨幣が用いられていた。豊富な銀産を誇る北部山地では、活発な交易活動を背景にして土銀と呼ばれる低品位銀錠が流通していた。また各種

銀錠に加え、19世紀のベトナムにはメキシコで鋳造されたドル系の洋式銀貨も流入していた。阮朝はこれらの洋式銀貨をモデルに飛龍金銀銭と呼ばれる独自の銀銭を鋳造し、これを計数貨幣として流通させようとしている。

19世紀のベトナムで銀の経済的重要性が高まった大きな理由は、阮朝が銀による租税納入を推進したためであった。阮朝期に銀納化された主要税目は、非キン族に対して賦課された人頭税、内国関税、港税などである。阮朝はこれら税目以外にも稲作小農民に賦課された土地税と人頭税を銀納化しようとしたが、この試みは1820年代までに挫折した。阮朝の銀納制は銭貨と密接な関係を持っている。銀税を課せられた納税者はしばしば銭貨によって銀を市場で購入し、国家への納税にあてていた。また阮朝は銀税の徴収にあたって半銀半銭納という独自の規定を設けており、銀税の実質的な納入額は国家の定める銀銭比価に大きく左右された。19世紀前半に深刻な社会問題となったのは、市場における銭建て銀価格の騰貴である。当時の銀価騰貴は、中国の銀価上昇と関連する外部的要因と、国内銭貨流通の変化という内部的要因の双方によって規定されていた。急激な銀価騰貴は納税者の負担を大きく増したため、阮朝は代銭納の許可や公定銀価の改定を余儀なくされていった。

徴税を通じて地方各省に集められた銀の大部分はその後フエに輸送されていた。財政活動によって地方の財貨をフエに集中する阮朝の経済体制は、「フエ・モデル」とも呼ぶべき独自性を持つものであった。阮朝の財政収入は米・銭貨・銀・金を基本としていたが、国内での財政活動に用いられたのは米と銭貨である。これに対し銀は、対外決済と儀礼用の貨幣として財政運営に独自の地位を占めていた。阮朝は土地税として徴収された米を地方からフエに輸送するため、漕運と呼ばれる国家的物流制度を構築した。阮朝の漕運制度において最も多くの米を供給したのは、北部平野諸省である。また漕運制度によって米とともに大量の銭貨がフエに輸送されていた。海路での輸送が行われた米と銭貨に対し、銀の輸送にはしばしば陸路が用いられた。地方からフエに輸送される銀の量は年々増加していったが、それに反比例して地方に割り当てられた銀備蓄の額は減少していった。地方からフエに輸送された銀は内務府で保管され、19世紀中盤の最盛期に内務府の銀備蓄額は300万両を超えていた。

阮朝期の通貨供給を考える際に最も重要なのが、鋳銭に必要な各種金属の調達である。阮朝は制銭として銅銭（真鍮銭）と亜鉛銭を鋳造したため、鋳銭原料として大量の銅と亜鉛が需要された。ベトナム国内の鉱産資源は北部地域に集中しており、銅の生産では宣光の聚龍銅山、亜鉛の生産では太原、海陽などが著名であった。ただこれら国内の資源だけでは銭貨鋳造に必要な量をまかない切れず、阮朝期には国外からも銅・亜鉛の輸入が図られている。鋳銭原料の輸入を担ったのは、ハノイに拠点を置く華人商人たちであった。華人商人は阮朝から資本の前貸しを受けて原料調達にあたった。また華人商人は自らが徴税を請負った内国関税の税額を銅と亜鉛で代納することにより、阮朝に大量の鋳銭原料を供給していた。華人商人が銅と亜鉛の主要な調達地としていたのは、雲南省の蒙自である。19世紀前半において、鋳銭原料の多くは国内鉱山もしくは雲南省から運ばれていた。しかし1860年代に入り中国人武装集団の活動によって北部の治安が悪化すると、従来使われていた原料調達ルートは機能不全に陥ることとなった。そこで阮朝の鋳銭に新しく用いられるようになったのが、「洋銅」「洋鉛」と呼ばれる銅と亜鉛であった。これらの銅は広東・香港を経由し、海上ルートによってベトナムへもたらされたものであった。同時代のフランス人による記述は、洋銅が日本銅であった可能性を示唆している。

通貨の安定的な供給は、鋳銭がいかなる組織体制のもとで行われるかにも大きく依存する。阮朝成立に先立つ18世紀のベトナムでは、華人に鋳銭事業を請け負わせることで大規模な鋳銭を実現した。成立間もない阮朝は、北部のハノイに最初の鋳銭局を設置する。そこでは民間人が自己資本によって原料調達と鋳銭を行うことが認められていた。また19世紀初頭には、前世紀同様に華人商人も鋳銭事業に深く関わっていた。阮朝の鋳銭体制は、嘉隆帝の死後1820～1840年代にかけて大きく変化する。この時期には民間資本を用いた鋳銭が行われなくなり、華人も鋳銭事業から排除された。代わって登場したのは、国家が原料の調達と職人の雇傭を直接行う集権的な鋳銭体制であった。このような鋳銭体制集権化の背景には、国家の貨幣高権を強調し、民間人や外国人による鋳銭をネガティブにとらえる明命期の貨幣思想が存在していた。4代皇帝である嗣徳帝の即位により、阮朝の鋳銭体制は1850年代から再び分権化の方向にシフトする。民間資本を用いた鋳銭が奨励され、華人による鋳銭も復活した。こうした政策は、当時深刻化していた民間の銭不足現象を解決するために、最も効率的な鋳銭拡大の方法が模索される中で採用されたものであった。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　多賀良寛　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	桃木　至朗
	副 査　大阪大学　教授	片山　剛
	副 査　大阪大学　准教授	田口　宏二朗

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　阮朝治下ベトナムの国家統合と貨幣経済

学位申請者　多賀良寛

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　桃木至朗

副査　大阪大学教授　　片山　剛

副査　大阪大学准教授　田口宏二朗

【論文内容の要旨】

本論文は、1802 年に樹立され現代ベトナム国家にほぼ等しい領域を史上初めて支配した阮朝ベトナムが、フランス植民地化以前の時期において、元来多様な「国内」諸地域・諸集団や、それらと深く結びついた「国外」の動きをどのように統御し、国家統合を実現・維持したかを、貨幣史を通じて探ろうとしたもので、序章・終章と本論８章、400 字詰め原稿用紙換算で 800 枚を超える大作である。序章で予告するように、宮廷文書を集成した「阮朝硃本」など近年利用可能となった多くの文書・文献史料を活用し、これを近年ダイナミックに発展したアジア貨幣史の研究成果（埋蔵銭の調査や化学分析などの考古・化学的成果も含む）や理論を踏まえながら、銭貨と銀という近世東アジアの代表的貨幣がベトナムでどのように造られ利用されたかを多面的に分析したことが、この大作につながったものである。

第１章～第３章は 17～18 世紀の南北分裂と内乱が残した貨幣の状況を踏まえて、阮朝が銅銭と亜鉛銭という二種類の銭貨をどのように鋳造・流通させ、他方で中国銭や先行する国内諸王朝の銭をどう扱ったかを考察する。有名な中国からの銀流出をきっかけとして 1820 年代の東アジアを襲った銭不足に対し、阮朝が自分で鋳造した亜鉛銭を使用実績のある中南部だけでなく全国に流通させる方法をもちいて効果的に対処した一方で、宿敵だったタイソン朝の銭が使用を厳禁されたため中国に大量流入した事実、1830 年代末から阮朝が自王朝の銅銭（タイソン銭以外の既存の中国・ベトナム銭は改鋳しようとした）も並行して流通させる政策に転じたことなど、国内外の大きな動きとその背景や連関が初めて本格的に論じられている。第４～６章では、阮朝が成立当初から重視した銀に目を転じ、秤量貨幣である「銀錠」を鋳造したり租税を銀納化するなどの著名な政策だけでなく、中国系その他の秤量貨幣、スペインドルに代表される計数貨幣の両方を含む多様な形態の銀貨同士の関係、またそれらと銭との交換比率などに関する諸政策、日本と同様に計数銀貨を発行しようという 1830 年代の企図、地方の銀を吸い上げることにより首都フエに巨大な銀（および銅銭や穀物）の備蓄を形成した徴税・財政のシステムなどが、可能な限り詳しく論じられている。最後に第７～８章では銭貨に戻り、銅や亜鉛など鋳造原料の調達と実際の鋳造のシステムを考察し、中国南部の銅や亜鉛などの輸入と、それを用いた銭貨鋳造における華人の役割を具体的に明らかにした。なお各章の終わりの部分では、以上のように国際的な銀・銭の変動に対応する中で 1820 年代以

来形成されてきたところの、閉じた貨幣流通圏の一元的管理を指向する政策（近代国民経済の前提ともなりうるもの）の各部分が、フランスの侵略が始まる 1850 年代の前後に、国際的な銀価の上昇や南中国の戦乱による鋳銭材料調達の困難などにより、崩れていく様子にも言及している。終章ではフランスの侵略が本格化した後のベトナム貨幣史を研究するうえでの課題を論じた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の学術的貢献は多岐にわたる。「東洋史学の一環としてのベトナム史の論文」として書かれた本論文が、近世中国の行政文書（檔案）の研究も踏まえながら、阮朝硃本を経済史に本格的に使用した世界でもほとんど前例のないモノグラフであること（硃本の由来と現況・内容構成などの親切な情報も含む）の意義は言うまでもない。加えて、「フエ・システム」と筆者が名付けた銀・銅銭・穀物などの中央への集中・備蓄と再分配のシステムの形成過程と構造をはじめ、貨幣・財政・物流などの角度から多面的に、しかもリージョナル・グローバルな変化の中に位置づけながら、阮朝国家統合の成立と変容を活写した本論文は、一国史やそれを前提とした「国際関係論」の枠組みのなかで「遅れてきた小中華」として語られることの多かった阮朝ベトナムを、まったく新しい位置に押し上げる土台を築いたものと評価できる。しかも本論文の役割は、東洋史学内部にとどまらない。近世～近代移行期の歴史的視野からの研究は、ベトナム地域研究としても高度な成果であるし、これまで空白に等しかったベトナムに関する本格的な研究がグローバル経済史に与えるインパクトは、中国からの銀流出など大規模な変動の時代の研究の一翼を担うだけに、小さなものではありえない。

本論文にはもちろん、物足りない点もある。個別事実の提示に執筆時間と紙幅を割いた分、各章全体をまとめた像を練り上げる作業が不十分に終わったため、銭貨の動きと銀の動きの関連などわかりにくい部分が残った。銭貨－銀－銭貨と３部分に分かれる本論の章立ても、全体像を示す目的では効果的でなかったように感じられる。とはいえ、それらは本論文のきわめて斬新な内容・方法の全体をそこなうものではない。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。